第495号
2024年10月27日

土佐のわらべ

オーテピア高知図書館
子どもの本の読書会だより

《第517回(2024年10月10日) 子どもの本の読書会記録》 参加者:7人
時間:10:00～11:30 場所:オーテピア4階集会室

『ナイチンゲールが歌ってる』 ルーマー・ゴッデン／作, 脇 明子／訳, 網中 いづる／絵 岩波書店

10月の課題図書は、『ナイチンゲールが歌ってる』でした。イギリス人作家、ルーマー・ゴッデンによる小説。おばちゃんと二人で暮らすロッティは、バレエの才能を認められ、王立バレエ学校を受験することになります。しかし、受験を前に、一匹の子犬と出会ってしまい・・・。1996年に出版された『トウシューズ』(偕成社)の新訳です。

次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

●古き良き時代の児童文学。安心して、楽しく読めた。旧訳の『トウシューズ』と比較して読んだが、訳者によって印象が違ってくる。児童虐待と思われるシーンも、昔の訳は虐待のようには表現されていない。『トウシューズ』の渡辺さんの訳の方が好き。新しい脇さんの訳は、原書の表現に近いのかも。昔は書き方が難しかったことも、今の時代なら伝わることがあるのだろう。

●大好きな作家。物語がテンポよく動き、ゴッデンはすばらしいストーリーテラーだと思う。ホルバイン劇場の舞台で、サルヴァトーレと踊って結婚の約束をしてしまうところなど、訳者のユーモアも感じた。アイリーンに注意をしなくなる先生を見ていたロッティには、周囲の反応に耳を澄ます、聞く力があった。それが、ナイチンゲールを聞くということなのでは。

●親がいなくても、貧しくても、周りの人が寄せてくれる気持ちで子どもは育つ。バレエが、ロッティを様々な人と出会わせてくれた。日常ではないところでバレエをすることにより、成長の幅が広がったと思う。先生や友だちとの出会いなど、経験することすべてがバレエに表れてくる。この作品から、温かい世界、しみじみとしたやさしさを感じた。

●バレエ学校で起きる、女友だちの友情と裏切り、少年からのいじめなど、つらい部分もあった。展開が早く、たくさんの人が出てくるので、本になじみのない子には読みづらいのでは。群像劇として、それぞれの人物がとても魅力的。その中でも、プリンスがいてくれてよかった。『トウシューズ』や『バレエダンサー』(偕成社)を読んでから、もう一度読みたい。面白かった。この本に出合えたのは、読書会のおかげ。

●久しぶりに児童書を読んだが、とてもよかった。心を動かされた。サルヴァトーレのことを「蜘蛛男」と呼ぶところなどは、笑ってしまった。ロッティを育ててくれた、おばちゃんの存在やアパートの人たちとの関係が良い。クリスマスには、みんなを呼んでパーティをする。人と人との関わりがすばらしい。ホルバインがなくなっても、そこで育った人たちが別の場所で芽を出すところも、人生の縮図のよう。

●読み終えたとき、幸せな気持ちになった。子犬とひと目で心を通わせたロッティには、温もりを感じる愛する対象が必要だったのかも。ゴッデンの作品には、良い大人がたくさん登場し、人の暖かさが感じられる。踊りのために切り捨てるのではなく、自分の大切なものに触れて感じることが大事。全てがうまくいって幸せ。子どもの本は、めでたしめでたしで締めくくられるのがよい。

●バレエ学校が、家庭や経済状況に関わらず、持っている才能を伸ばすことができる仕組みになっているところがすばらしい。見るもの、聞くもの、さわるもの、すべてが踊りに関わってくる、というセリフに、なるほどと思った。誰に対しても愛情を注ぎ、感謝の気持ちを持つロッティは、それが踊りに表れていると思う。自分たちも、日々の過ごし方や考え方が態度に表れているのかも。

次回 11月14日(木)10:00～11:30 オーテピア4階集会室
『木の中の魚』 リンダ・マラリー・ハント／著, 中井 はるの／訳 講談社
※申込み・参加費は不要です。
「世界の本の読書会」を開催。国際交流員が舞台となる国の生活や文化を解説します。